NEUT: *n* – C (非弾性散乱)の NPB&N2N チャン ネルのイベント生成モデル

Y. Satou, Y. Makimura

August 31, 2024

Abstract

n-C (非弾性散乱)の NPB&N2N チャンネル (Ch#6) のイベント生成モデ ルについて述べる。

1 はじめに

NEUT の反応チャンネルの六番目は、n – C 非弾性散乱の NPB&N2N 反応である。 すなわち、陽子ノックアウト反応 (NPB)、及び中性子ノックアウト反応 (N2N) が取 り扱われている。モデルとして想定されたこのチャンネルの全反応断面積、並びに、 N2N 反応の部分断面積のエネルギー依存性を図 1 の、それぞれ、黒線と赤線で示す。

現代的な質量偏差値を用いて計算される、NPB 反応の Q 値は -15.96 MeV、閾 値エネルギーは $E_n = 17.30$ MeV である。N2N 反応の Q 値は -18.72 MeV、閾値エ ネルギーは $E_n = 20.29$ MeV である。

2 NBP&N2N チャンネルの角度分布

このチャンネルでは散乱は $n+^{12}C \rightarrow d+^{11}B$ 、もしくは $n+^{12}C \rightarrow (nn)+^{11}C$ の二体 散乱として取り扱われる。出射重陽子(もしくは、nn系)の運動エネルギーが事後 的に陽子と中性子(あるいは二中性子)に一様乱数を振って分配される。散乱の角度 $(x = \cos \theta_{cm})$ 分布は x = [0,1]の区間の単調増加関数に取られる。この為に用意され た断面積の重み関数 (dF/dx) とその定積分 (F)、及び前者の規格化は下記の通り。

$$\frac{dF}{dx} = 2x, \tag{1}$$

$$F = x^2, (2)$$

$$\int_{0.0}^{1.0} \frac{dF}{dx} dx = 1.0.$$
(3)

図 2 に NPB チャンネルについて生成されたイベントのヒストグラム(黒点)と、 式 (1) の単調増加関数(実線)を示す。企図された通りのイベント分布が実現してい る事が見て取れる。

図 3 に、NPB チャンネルについて生成されたイベントの CM 系の角度 ($\cos \theta_{cm}$) 分布、実験室系の角度 ($\cos \theta_{lab}$) 分布、及び、陽子(もしくは中性子)の実験室系で



Figure 1: *n* – C 非弾性散乱の NPB&N2N 反応チャンネル (Ch#6) について想定さ れた断面積 (黒線:全断面積、赤線:N2N 反応の部分断面積) のエネルギー依存性。

のエネルギー分布を示す。陽子エネルギーの最高値は、想定したビームエネルギーの 200 MeV に達しない。これは、負の反応*Q*値の為である。参考の為、NPB チャンネ ルで想定された二体の運動学の $E - \theta$ プロット $[E_d^{\text{lab}}$ (or $E(^{11}\text{B})^{\text{lab}})$ vs. $\theta_{\text{cm}}]$ を図 4 に示す。

3 N2N チャンネルのバグについて

NEUT では、断面積の重みに従って、NPB チャンネルと N2N チャンネルの振り分 けがなされる。N2N チャンネルが選択された場合、プログラム中のコメントによれ ば、散乱中性子はそのまま FOLNUT サブルーチン内に留め、ノックアウト中性子は SECNUT サブルーチンで追跡する仕様となっている。ところが、手持ちのコードは、 散乱中性子について、そのエネルギーを SECNUT のコール後に w=0. とし、直後 に FOLNUT を抜ける仕様となっていた。これは、バグと思われるので、goto 1000 ラインを挿入して(w=0. 部を回避し)、引き続き FOLNUT 内で散乱中性子の追跡 が継続される様、仕様を変更した。修正適用後の関連部分のソースを補遺 A に示す。

図 5 の左パネルに、 $E_n = 200$ MeV での、報告 [1] に述べたシンチレータに対する 積分検出効率の発光量依存性を示す。上記 goto 1000 ステートメント無し、SECNUT 無しの場合(黒線)、goto 1000 ステートメント無し、SECNUT 有りの場合(緑線)、 goto 1000 ステートメント有り、SECNUT 無しの場合(青線)、及び、goto 1000 ス テートメント有り、SECNUT 有りの場合(赤線)のそれぞれの結果を示す。N2N チャ ンネルで二つの中性子の追尾を無効とする場合(黒線)と他の場合は軽微だが検知可 能な違いを有する。



Figure 2: NPB チャンネルのイベントの角度分布。



Figure 3: $E_n = 200$ MeV での NPB チャンネルについて得た、陽子(もしくは中性子)イベントの CM 角度分布、実験室系角度分布、及び、エネルギー分布。



Figure 4: $E_n = 200 \text{ MeV}$ での $n + {}^{12}\text{C} \rightarrow d + {}^{11}\text{B}$ 反応の運動学。 E_d^{lab} (or $E({}^{11}\text{B})^{\text{lab}}$) vs. θ_{cm} のプロット。



Figure 5: $E_n = 200$ MeV の中性子に対する厚さ 15 cm のプラスチックシンチレータ の積分検出効率。Ch#6 における、散乱、反跳中性子の追尾の有無や、考慮するサブ チャンネル (NPB&N2N or N2N only) を変えて得た結果。

図 5 の右パネルに、Ch#6 を全て(強制的に) N2N 反応に帰着させて得た同様の 図を示す。散乱、並びに反跳中性子の追尾の度合いを段階的に上げるにつれて、積分 検出効率が増大する様子が見て取れる。

A NPB&N2N チャンネルのソースコード(改変後)

```
C N+C--P+12B OCCURRED (REACTION CHANNEL 6)
 600 MS=6
С
С
     NOTE THAT THE N2N CROSS SECTION IS GROUPED OR INCLUDED
С
     IN THE CODE AS PART OF THE NPB CROSS SECTIONS
С
С
     TO DETERMINE WHEN AN N2N OCCURS THE MONTE CARLO METHOD IS
С
     USED ALONG WITH AN EMPERICAL EXPRESSION WHICH SIMPLY REPRESENTS
С
     THE SPARCE EXPERIMENTAL N2N CROSS SECTION DATA AVAILABLE
С
CC Test switch 2024.08.29 -----
     IF (E.LE.20.3) GOTO 9221
      goto 10222 ! Force the N2N channel
CC
CC -----
                    ------
С
     CHOOSE NPB OR (N,2N)
     DUMMY=.022*(1.-EXP((20.3-E)/7.))/S(6)
С
     THE CHOICE BETWEEN NPB AND N2N IS MADE IN THE FOLLOWING IF
     STATEMENT USING THE EMPERICAL EXPRESSION ABOVE WHICH GIVES THE
С
     N2N CROSS SECTION IN BARNS ABOVE 20.3 MEV (THRESHOLD)
С
CC Test switch 2024.08.29 -----
     IF (DUMMY.GT.UNIRND(Y)) GO TO 10222
CC
      goto 10222 ! Force the N2N channel
CC ------
С
      START OF NPB-----
 9221 DUMM1=10239.05+15.95
 9224 CALL KINNR(RM1,RM2,RM5,DUMM1,E,SQRT(UNIRND(Y)),VB,WCM,PCM,COSLP,E)
     W = E * UNIRND(Y)
С
     PROTON ENERGY UNIFORMLY DISTRIBUTED BETWEEN O AND MAX VALUE
С
     IF RESCATTERED NEUTRON ASSUME SAME SCATTERING ANGLE AS PROTON
     COSL=COSLP
     ELT=EEQUIV(W,X,C,COSLP,1)
     APPROX PCT N+C=N+P+B FOR RESCATTERED NEUTRON
С
     IF (UNIRND(Y).LE.O.1) GO TO 9220
     W=E-W
С
     GIVE NEUTRON ENERGY NOT GIVEN TO PROTON
     GOTO 1000
С
     EEQUIV RETURNS LIGHT OUTPUT FOR PROTON OF ENERGY EN
C (NO NEUTRON RELEASED)
 9220 CONTINUE
С
      END OF NPB------
```

```
GOTO 950
    (N,2N) , START OF-----
С
С
    TREAT N2N SAME AS NPB KINEMATICALLY EXCEPT FOR THRESHOLD
10222 CALL KINNR(RM1,RM2,1882.8,RM6,E,SQRT(UNIRND(Y)),VB,WCM,PCM,COSL,E)
    CALL SCATTR(C,COSL,6.2832*UNIRND(Y),C1S)
    DO 9223 I=1,3
9223 X1S(I)=X(I)
    W=E*UNIRND(Y) ! First neutron energy.
    E=E-W ! Second neutron energy.
CC -----
    CALL SECNUT(X1S,C1S,E,.1,EL,NS1S)
CC ------
CC Following goto 1000 statement seems to be necessary ------
CC not to diminish the first neutron. 2024.08.29 Y.Satou
    goto 1000
CC -----
С
    FOLLOW ONE NEUTRON WITH SECNUT AND THE OTHER STAYS IN FOLNUT
    (N,2N) , END OF-----
С
 950 W=0.
    COSL=1.
С
 INCREMENT THE ELEMENT MS=1 TO 6 OF THE LIGHT OUTPUT ARRAY ELT
C CORRESPONDING TO THE CHANNEL OF INTERACTION, AND ELT(7), THE TOTAL
C LIGHT OUTPUT
1000 EL(MS)=EL(MS)+ELT
```

References

[1] Demonstrational calculations with neut (Y.Satou, Y.Makimura).